

立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所
第七號拔刷
二〇一三年七月発行

《天亡殷》私考——殷周革命論ノート（二）——

高
島
敏
夫

《天亡殷》私考——殷周革命論ノート（一）——

高 島 敏 夫

はじめに

西周時代最初のものと目される《天亡殷》はかつて多くの論者が解讀を試みており、すでに論じ盡くされた感のある銘文だが、なお重要な點が不明なまま残っているのも確かである。白川靜も器名を《大豐殷》として『金文通釋』の冒頭に綿密な考證を展開しているのだから、^①私ごときが屋上屋を架すまねなど無用のことだと思ってきた。だが白川文字學の觀點から、殷末周初の周原甲骨を論じる過程で殷周關係を考える新たな視點を得てからは、《天亡殷》を再讀する必要性を感じるようになった。殷末周初に起こった王朝の交代劇を殷周革命と呼ぶことがあるのは周知の通りである。とはいえ出來事の表層が伝えられてきただけで、具體的な過程は一向に明らかでなかった。殷王朝が滅んだ原因が最後の王帝辛（紂王）の反道德的な暴虐によるものであるかのごとく仕立てられ、^②實態が明らかにされてこなかった。しかし一八九九年の甲骨文の發見以降甲骨金文の研究が進んで、殷代の歴史や文化の様相が次第に具體的に知られるようになってきた。

また青銅器も陸續と出土し銘文資料が蓄積されてきて、殷周時代の歴史を復元する上で重要な役割を果たすようになった。だが殷周革命の過程を知るための資料としては十分ではなく、一九七七年に陝西省の岐山縣から周原甲骨が出土するまでは今一つ手がかりが掴めなかったのである。今回は《天亡殷》を對象とするが、殷周革命の實態を解明するための資料と考えられるものを左に列挙する。

- 一、殷代の殷墟出土の甲骨文（「殷墟甲骨」と略稱する）
- 二、殷末周初の周原出土の甲骨文（「周原甲骨」と略稱する）
- 三、殷末以降の金文
- 四、殷末周初の周公廟遺址出土の甲骨文（「周公廟甲骨」と略稱する）

このうち四は、二〇〇三年に陝西省岐山縣の周公廟遺址で發見され現在整理中であるが、そこには殷末周初に關する從來の歴史理解を大幅に書き換える事柄が記されているとのことである。これが殷周革命

の實態を解明するための缺くべからざる資料となるのは明らかである。

二は、殷末周初の殷周關係を解明する上で貴重な意味をもつ資料ではあるが、細かく割れた状態で發見されたため、一定のまとまった文章として讀めるものが極少數に過ぎず、資料として十分に活用できていないのが實狀である。だがそうした制約の下にあっても、殷墟甲骨文や殷末金文とを對照させながら私なりに解明を試み、一つの視點を得ることができたと考えている。今回「私考」と銘打ったのはその視點に立って讀解を試みるという意味を込めたものである。これを「讀解の前提」として簡単に記しておきたい。

讀解の前提

一、帝は殷の超越神であり、天は周の超越神である。帝は上帝ともいう。

二、周の文王は殷の宗教的體制の中で殷王との間に君臣關係を結んだ。(西伯と稱される。)

三、殷から西史召と稱され、外郭から殷王朝を支えていた召族(後の召公)が殷末に西周王朝に付いた。

四、召公は西周王朝では皇天尹大保と稱され、天のことを掌りその長官の位置にあった。

一の帝の捉え方は、白川靜『甲骨文の世界』にも記されている常識的なことであるから改めて説明を要しないであろう。天についても歴

史的によく知られるところである。帝と天とがしばしば同等に見なされるようになるのはかなり後のことであって、これらはともとも起源を異にするものである。同等に見なされるようになっていったのは、西周王朝の中で帝(上帝)も天も祭るようになったからである。《天亡毀》はそのような祭祀の様子を記すものである。

二については拙稿『周原甲骨の歴史的位相』と『殷末先周期の殷周關係——周原出土甲骨讀解試論』とで論じたものである。今回の小考はその土臺の上に展開するものである。

三の召公については白川靜「召方考」「釋史」などに詳論されているだけでなく、一般書にも隨所に言及されてきた。また白川文字學を理解していただくための手引きとして書いた拙稿「讀『釋史』」にも記しておいたのでご参照いただきたい。

四については西周時代の金文にしばしば出てくることなので周知事項と考えていいだろう。

以上の前提に基づいて殷末周初の歴史的經過を簡単にまとめると次のようになる。

殷王朝は超越神・帝を上に戴く宗教的體制を敷いて諸族を王朝の傘下に集めていた。この體制は神の力による諸族の統合であって、諸族を直接支配するような政治的體制ではまだなかった。これを白川は殷の宗教的支配と呼ぶことがある。その宗教的體制を外郭から支えていたのが西史召と呼ばれた召族である。召は當初殷から召方と呼ばれていたことから分かるように、必ずしも殷王朝に從屬していたわけでは

なかった。しかしやがて殷の祭祀を積極的に行なうようになる。西史召という呼稱は、殷の西方にあって殷の祭祀を行なう者の意味である。この體制が殷末まで続く。殷末の金文にもそのようなことを示す例が見える。¹⁹⁾

殷代末期になると西方にあった周の文王が急速に勢力を集めるようになり、殷王朝と對峙して殷を壓倒する形勢になってくる。だがそのような形勢にあっても文王は殷に攻め入ることなく、殷の宗教的體制の中では殷に従屬する形をとって、殷の祭祀を行なっていたのである。文王が殷から西伯とも呼ばれたのは周知のことであるが、西伯とは西方の覇者というほどの意味である。殷を中心とする宗教的秩序が崩れるのが殷代最末期で、この時期に召族が西周王朝に付くのである。この動向がどのような情勢の中で起きたのかは詳らかでない。

また、殷末の第五期甲骨の分析によって、天の思想は殷にも浸透しつつあったかも知れないという想定を一つの可能性として提示しておいた。前掲の『殷末先周期の殷周關係——周原出土甲骨讀解試論』では、殷末のこのような情勢を二重權力論の觀點から次のように捉えておいた。すなわち、宗教的秩序の宗主である殷王朝と軍事的力をもつ西周王朝との二重權力が並び立っていたというように。

文王の死後息子の武王が即位し殷を滅ぼす。これは史書にも書かれた周知のことだが、殷を滅ぼしたといっても、實際には王子聖と呼ばれた象子聖を頭に戴く殘存勢力があつて、まだ統一を實現したわけではなかった。王子聖の名は金文にも見える。¹⁸⁾一方召族の長は西周王朝に付いた後、天のことを掌り皇天尹大保という稱號を得る。¹⁹⁾その時の

召族の長が召公奭であつた。《天亡毚》の銘文はこのような情勢の中で行なわれた王朝祭祀の様子を記すものである。

《天亡毚》概要

器の出土時期は清の道光末年（一九世紀中頃）、出土地は陝西省岐山縣と伝えられる。《毛公鼎》と同出とも伝えられる點が目を引くが詳細は不明である。それと、《毛公鼎》に對しては一時日本の研究者の間で疑問をもたれたこともあつて、扱いにくい青銅器とされてきたように思われる。《毛公鼎》があたかも偽器であるかのような疑問を抱かれたのは、その頃標準と思われた青銅器の器制からかなり外れるものであつたことによるが、私の記憶では「疑いを起こすに足る」とされたまま放置されてきたように思う。しかし「疑いを起こすに足る」という意見が出ただけで偽物だと思ひ込むのは、必ずしも學問的な態度ではない。「疑いを起こす」元になった理由が適切であつたかどうか問われなければならないのではないだろうか。

二〇〇三年に周公廟遺址から西周時代の大墓が出て王陵ではないかと一時大騒ぎになったが、今は周公の領地であろうという認識に落ち著きつつあるようだ。その周公廟遺址の一角からは甲骨文も出土し、M四〇と呼ばれる墓からは盜掘を免れた青銅器も發見されている。その青銅器が變つた器制をしているという報告もされた。¹³⁾この時私が連想したのは《毛公鼎》である。毛公は周公の後裔の可能性がある。西周時代の銘文で周公の名が見えるのは前期であつて、後期にはその名が見えない。それに代わって毛公の名が見える。この《毛公鼎》の

も知れないと想像する。天室といえは扶風縣召陳村に「天室」を思わせる天圓地方の建物が發見されているので【圖1】⁽¹⁵⁾、扶風縣の可能性も否定できないと思うが、出土地を周公廟遺址と假定しているののでこの銘文に見える天室も同地に假定しておくのである。

以上「概要」として記したが、『天亡殷』の銘文を考えるにあたって、私の想定していることを豫め記しておいた。

本文と訓讀

乙亥、王又大豐、王月三方、王祀𠄎天室、降、天亡又王、衣祀𠄎王、不顯考文王、事喜上帝、文王臨才上、不顯王乍省、不繇王乍賁、不兢王衣、王祀、丁丑、王鄉、大宜、王降。亡助爵後□、佳朕又慶、每𠄎王休𠄎障

(乙亥、王大豐あり、王三方に月す。王天室に祀る。降る。天亡王を佑け、王に衣祀す。不顯なる考文王、上帝に事へて喜ばしむ。文王臨みて上に在り。不顯なる王省を作す。不繇なる王賁ぐことを作す。不兢なる王衣す。王祀る。丁丑、王饗して大宜す。王降る。亡爵後□を嘉せらる。佳れ朕に慶有り。王の休を障に敏揚す。)

譯讀

乙亥の日、王は大體の儀式を行なわれた。その時三方に祈る儀式を行なわれた。

そのあと王は天室で天の祭儀を行ない、天室を降りられた。次いでわたくし天亡（人名）が王の介添えをし王の宮室で殷の祭祀

を行なった。賢明で偉大な亡父文王は殷の至上神である上帝に仕えて樂しませておられる。父文王は上帝の側にいて我ら下界を見守って下さっている。

唱え言。賢明で偉大な我が王（武王）は領土を安堵された。また大いに威嚴のある我が王（武王）は父文王を正式に繼承された。またこの上なく慎み深い我が王（武王）は殷の祭祀を行なわれた。かくて乙亥の祭儀を終えた。

二日後の丁丑の日、王は饗宴を催し、殷王朝由來の大宜という儀禮を行なった。かくて丁丑の祭儀をすべて終えたのである。



圖2 天亡殷器影



圖3 天亡毀銘文

天と上帝とを祭る重要な儀禮を舉行するにおいて、王の介添え役を務めたわたくし亡は、その功績を王から稱えられ禮器の爵後□を賜った。このような慶事を得たのを記念して、慎んでこの器を作り王の賜物に應える次第である。

語釋と考證

金文の用例を徹底的に集めてきて語の概念を絞り込んでいくという方法は白川靜の學風である。本稿も基本的には師の方法に習うものであるが、前述したような事柄を前提に銘文を捉え直すことを試みたい。

大豊＝豊は醴の意味と思われる。後に「酉」という限定符を付加して

卿體のように醴字形に書かれるが、酉は酒器の尊の象形である。この限定符によって醴が酒を用いた儀禮であることを示している。

王月三方＝「月」字が不明であるため何を意味する句なのか分からないが、字形は「受(𠂔)」に見られるような、賜物が授受される時に用いられる器のように見える。ここでは三方に拜禮して神の賜物を祈る意味と見なしておく。

王祀卣天室＝天室に祭る。天室という宗教施設があり、そこで王が儀禮を行なったのである。天室という語はこの《天亡毀》にだけ見える語である。そこには超越神としての天が祭られていたものと思われる。天亡は天のことを掌る職務を擔當していたのであろう。天のことを掌る人物の代表としては皇天尹大保と呼ばれる召公がいる。尹は長官の意味であるから皇天尹とは天のことを掌る長官というほどの意味になる。天亡は召公の配下にあつたのであろう。《天亡毀》の出土が周公一族の邑地と目される周公廟遺址であるとすれば、天室は周公一族の邑地にあった可能性がある。ただ、周公廟遺址の東方にあるいわゆる周原東部の扶風縣からは天室を階上に戴く構造の建築物が出土している【圖1】。これは天圓地方つまり階上が圓形、階下が方形になっている珍しい構造の建物で、いかにも天を祭っている建物にふさわしいものである。扶風縣のものを天室と見なしているのか、あるいは周公廟遺址にも天室があつたのか、發掘の報告を待つところである。なお、扶風縣の件の建物は一棟だけが

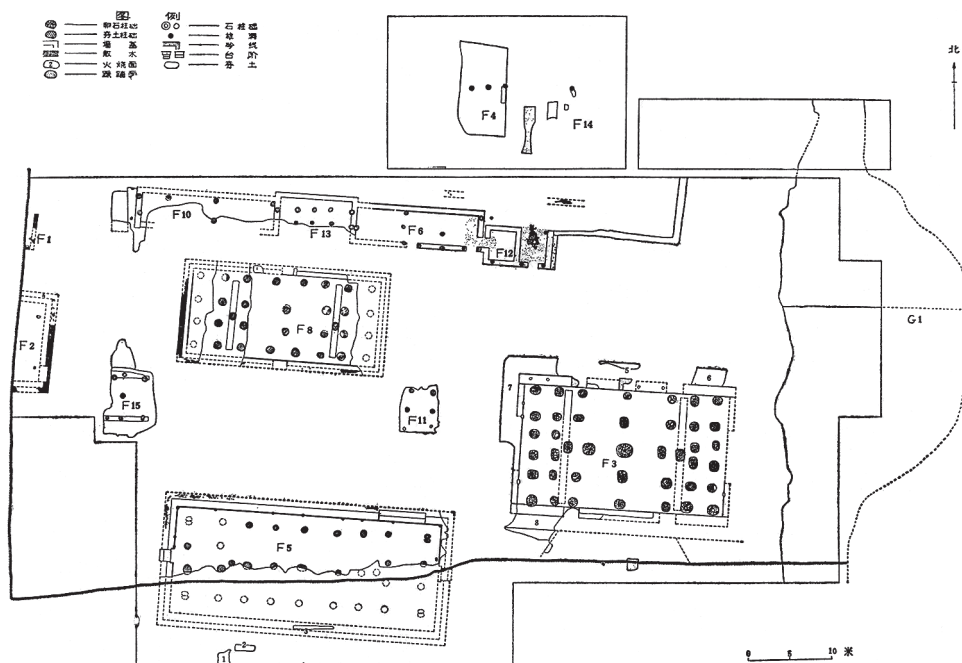


圖4 陝西省扶風縣召陳村西周建築群

建っていたのではなく、建築群の中の一棟（F3）である【圖4】⁽¹⁶⁾。周公廟遺址にはそれよりも多くの建物が建っているようである。⁽¹⁷⁾私の漠然とした想定では扶風縣の建築群が召公族のもの、周公廟遺址の建築群が周公族のものではないかと思っているのだが、發掘報告によってそうした見當が当たっているかどうか、大いに興味をそそられる。

降＝天室から降るの意味と捉えていいだろう。降という語には次の四つの用法がある。

①「王降征令于大保。」（王 征令を大保に降す）のように王が命令を降すという用法。

②「大神其陟降。」（大神其れ陟降す）のように神が天地の間を陟り降りするの「降る」の用法。

③「上帝降懿德。」（上帝懿德を降す）のように神が徳を降すという用法。西周金文にはこの他に「降多福。」（多福を降す）の用例が多数見られる。降すの主語は祖神である高祖や祖考であることが多い。多福が降されるという場合が多いが「多福」の代わりに「大魯福」「厚多福」「魯多福」と更に強調する修辭も見られる。

④「天降喪。」（天 喪を降す）のように福とは反對の喪（天災）を降すという用法。

この降は、文脈から見て王が發令したり上帝が徳や喪を降す意味とは思われないので、②の用法以外には考えられない。王が天室で祭祀を行なった後、天室から降ったと捉えるのが妥當

であろう。天室は階段から陟り降りする構造になっていたようである。

天亡又王、衣祀玁王¹¹天亡が王を佑け、王に衣祀するとはどういうことであろうか？ 前の王と後の王とは同じ意味なのかどうか。白川は後者を王所と解することだが、その王所とはどこのことなのだろうか？ 儀禮を行なう時に王の即くべき所定の位置という意味であろうか？ あるいは王の居る所定の部屋があったのであろうか？ 今これを假に王の宮室としておくことにする。次に衣祀の意味を押さえておこう。

衣祀という語は殷末すなわち殷墟甲骨第五期に見える語で、白川の考證により、殷の祖考を合祀することを意味する語であることが明らかに¹²なった。だがそれは殷王朝としての合祭であって、西周王朝の合祭を意味しない。殷を滅ぼした後で西周王朝が用いる語と捉えるならば、殷祀すなわち殷の祭祀と理解すべきではないか。殷代末期にいたって西周の文王は殷の祭祀を行なうことを受け入れ、殷との間に宗教的君臣関係を結んだ。その関係がここにも繼承されていて、殷の祭祀を行なっていると見るべきであろう。ということは、西周王朝における國家的祭祀には、西周王朝の超越神である天を祀る祭祀と、殷王朝の超越神である上帝を祀る祭祀とが行なわれたと見るべきであろう。このようにしてはじめて西周王朝は殷系氏族を西周王朝内に迎え入れることができるのである。西周時代以降も殷の超越神が祭祀の対象として繼承されるのはそのような事情からである。その衣祀を王と呼ばれる宮

室で行なったということになる。

不顯考文王¹³「考」とは亡父の意味であるから、「不顯なる考」という呼び方は現王が武王であることを示している。

事喜上帝¹⁴前王である文王が、上帝に事喜するという。この「事喜」が問題になる。白川静はこれを「事饌」として「よく上帝に事える」意だとする。ただこれだけでは「事」の意味を述べるにとどまる。

「喜」は「字通」には「神に祈るとき、鼓をうって神を楽しませる意。」と記しているが、金文における「喜」の用例を見ていると鐘に記されている場合が壓倒的に多く、音楽をもって神を楽しませる意味に用いるのが一般的なようである。参考までに左に例を挙げておく。時期は①が西周中期であるのを除けばみな西周後期のものである。これが全てではないが割愛した。

- ① 追孝于高祖辛公文祖乙公皇考丁公𩇑𩇑鐘。用卽各喜侃樂前蒔文人。《瘠鐘》集成二四六
- ② 兮仲作大鏜鐘。其用追孝于皇考己白、用侃喜前文人。《兮仲鐘》集成六五
- ③ 敢對揚天子休、用作朕皇考𩇑𩇑鐘。用侃喜上下。用樂好賓。《鮮鐘》集成一四三
- ④ 弔妣乍寶𩇑𩇑。眾仲氏萬年用。侃喜百生。《弔妣殷》集成四一三七
- ⑤ 朕皇考德弔大𩇑𩇑。用喜侃前文人。《師史鐘》集成一四一
- ⑥ 作朕皇考弔氏寶𩇑𩇑。用喜侃皇考。皇考其嚴才上。《土父鐘》

集成一四五

⑦ 用作朕皇祖考𦣻鐘。鎛鎛總總。鎛鎛□□。用卽各喜侃前文人。

《𦣻其鐘》集成一八七

⑧ 作厥王王大寶。用喜侃前文人。《五祀𦣻鐘》集成三五八

この用法は西周後期の場合が多く、《天亡𦣻》のような用法は例外に属するので判断しにくいところではあるが、西周初期の銘文にはまだ定型化していない表現が多いようである。𦣻は盛食器であるから、穀物を神に供薦したものである。白川が「事饌」とした理由はおそらくここにあるのだろうが、音楽か食物かの違いがあったとしても、神を樂しませる意味には違いないので、文王が上帝に仕えて樂しませるといふ意味になる。

次は帝（上帝）について述べる。上帝は單に帝とだけいうことが多い。「帝」は元來殷王朝のバックボーンである超越神であつて、西周王朝の超越神ではない。西周王朝の超越神は「天」である。その上帝を天と同様に祭るのである。これについては今まであまり關心を持たなかった。西周王朝の中にもともと帝を祭る風習があつたかのように思われてきたようだが、帝の名は甲骨文に頻出する殷の超越神である。風の神、山の神、河の神、雨の神など八百萬の自然神を統括する至上神としての帝は殷人の崇拜する對象であつた。文王は殷から西伯とも呼ばれたように、殷の宗教的體制内における西方の覇者であつた。その文王が死後も殷の至上神であつた上帝に事えて樂しませるといふ形で祭られている

のである。殷末以來の宗教的關係が繼承されていると捉えるべきであろう。

文王臨在上。文王が天上にあつて下界を見守っていることをいう。三字目が若干缺けているため文字が特定しにくい、白川靜は臨とする。ただ金文の臨は「𠂔」を三つ並べる形になっているのが一般的であるため字形認識としては疑問が晴れないものの、初期の金文であるから𠂔字形を付加していない可能性はある。後に「𠂔」字形を付加する文字でも初期の文字には付加していない例は多い。𠂔字形を付加しない字形と見るならば臥ということになるが、この場合の臥は床に臥すの意味ではなく、白川が「人が臥して下方を見る形」とするように、下を見下ろすの意味である。

この字形を臨の初期形態と見ておきたい。『字通』には「監は鑑に臥して姿をみる意。臨はそのような姿勢で下界に臨むことをいう。」とあるが、文字（語）の用法を踏まえた解釋になつていて説得力がある。文王は天上にあつて超越神である天と上帝に仕えながら、下界を見下ろしているのである。

丕顯王乍省。領土の安堵をいう。ここから三句は現王である武王の事蹟を稱揚する言葉になる。次の二句「不繇王」「不兢王」の王を武王ではなく成王と康王に當てるのが白川の解釋だが、これは衣祀が祖考の合祭とする考え方を西周王朝にも適用したものである。そのために《天亡𦣻》の斷代を康王にまで下げることになるのだが、器制と紋様を考古學的に見ると康王期まで下げると収まりが悪い。林巳奈夫氏の分期では西周ⅠAとし、唐蘭・陳夢家・

銘文選などみな武王期とするように西周初期のものと考えてるのが妥當と考える。ここでは不顯なる王とは言うまでもなく武王のこ
とである。その武王が省を行なった。省とは勝利して得た領土を
巡視することをいうもので、この巡視によって領土を安堵する意
味があったものと思われる。

丕繇王乍虎Ⅱ武王が、西周王朝を隆盛に導いた文王を繼承する正統の
王であることをいう。「丕繇」は「丕いに繇なる」と、王を讃え
る形容語であるが、用例が少ないだけにどのような意味合いの語
であるかを特定することは難しい。白川が「威儀あるさま」とし
ているのに従う。白川によれば「丕繇」は徳をもつていう語のよ
うだという。「丕繇」がそのような意味であるとすれば、古代語
としての「徳」には神から賦與された靈力（カリスマ）の意味が
あるので、王に相應しい人物であることを示す語になる。「徳」
にこのような意味があることについては、拙稿「春秋時代におけ
る『天命』と『大命』」に述べておいた。

丕兢王衣Ⅱ武王が衣祀を行なった。「王」とした文字は腐蝕によりか
なり削られているため特定が難しい。三と釋する説と乞（迄）と
釋する説がある。ただ三という文字だと「王月三方」の場合と比
べて刻り方がかなり違って見えるように見える。金文の數字は「王
月三方」の三に見られるように數字だけに特有の刻り方がされる
のだが、この場合はそのような刻り方になっていない。また
乞であれば第三線が右下に流れる線がある筈だが、そのスペース
もなくそうした流れになっていない。王の字はこの銘文では一二

回出てくるが、文字の大小も形も多彩でそうした多様な字形の範
圍内に収まるように思われる。丕兢の意味が定めにくいが、「兢」
の意を『字通』を参考にして慎み深いの意味にとり、「丕兢」で
非常に慎み深いの意とする。衣は衣祀の省略形であろう。

ここまでの三句を再度整理してみる。文王を繼承した武王の事
蹟を稱揚したもので、「不顯王乍省」で領土の安堵を述べ、「丕繇
王乍虎」で王位の繼承を記し、さらに「丕兢王衣」によって殷の
祭祀の繼承を記す。この三點は殷を滅ぼした後の西周王朝にとっ
て非常に重要な意味をもつ王の務めであった。衣祀のことを繰り
返し述べる内容になっているのは、殷を滅ぼしたからといって殷
の超越神や殷の祖神をないがしろにするのではなく、鄭重に迎え
入れることによって殷系諸族を西周王朝の中に迎え入れることが
できるという思想的な理由があったからである。この器に記され
た王朝の祭祀は、その天と帝とをともに祭る祭儀になっていると
思われる。

王祀Ⅱ殷の衣祀を行なった後に周の祭祀を行なってこの日の祭祀をし
めくくったものであろう。

丁丑王卿大宜Ⅱ乙亥の翌々日の丁丑の日に王が饗宴を催し、大宜とい
う儀禮を行なった。大宜という語は西周時代の金文ではこの《天
亡毀》の他には使われない。ただ「宜（𠄎）」という儀禮は甲骨
文では祖神を祭る儀禮として頻出するもので、いわば殷王朝由來
の儀禮と思われる。西周時代以降は初期の青銅器であるこの《天
亡毀》の他に、《令毀》に「隣宜」の形で用いられるくらいで次

第に行なわれなくなって行った儀禮である。「隣宜」はこの「卿大宜」と同じ意味を示しているかも知れない。令という人物は西周王朝では文字のことを掌る作冊の職にあった殷系氏族で、西周王朝に付いた後も殷の祭祀を行なうことがあったものと思われる。だが殷の祭祀を行なっていたのは西周前期までで、中期以降は酒器が急速に消えていく現象からも分かるように、西周王朝本来の祭祀へと大きく轉換していくのである。宜の儀禮が西周初期だけに見えるのもそのような動向を示すものであろう。

王降¹¹儀禮の場から降りるの意である。かくて三日にわたった一連の儀禮が終了するのである。

亡助(嘉)爵後□¹²この度の祭祀において、王の介添え役をよく務めた天亡が稱えられ、爵などの彝器を王から賜わったことをいうものだと思う。助は白川の解釋に従って嘉の意とする。「爵」字は青銅器の爵を象った字形である。爵の描き方は一般的に簡略なシルエット風のもの【圖5】⁽²⁰⁾が多いが、この「爵」字は柱まで描かれている點で類例がない。□としておいたものも彝器を象ったものと思われる。彝器という語を使ったが儀禮に用いる青銅器を意味する語である。



圖5 爵父癸盃

佳朕又慶¹³朕に以上のような慶事が有ったということであろう。

每玆(敏揚)王休¹⁴隣¹⁵王の上記の賜物に應えて作器したという経緯を記して結びとしている。休は賜物の意。「王の休に對揚して寶隣彝を作る」という言い方が後に定型化していくが、時には「敏揚」とする場合がある。對揚よりもいっそう鄭重な意味になる。西周最初期の《天亡毘》の銘文はまだそのような常套句的表現が見られず、それだけ意味が取りにくいのが、子々孫々まで稱えられるべき出来事を記して彝器を作るという経緯を記す内容になっている點では、金文の文體の型がすでに見られる。

注

- (1)「白鶴美術館誌」第一輯「金文通釋」(白鶴美術館 一九六二年)後に『白川靜著作集別巻』「金文通釋」一上(平凡社 二〇〇四年)
- (2)例えば「史記・股本紀」には「帝紂資辨捷疾、聞見甚敏。材力過人、手格猛獸。知足以距諫、言足以飾非。矜人臣以能、高天下以聲、以爲皆出己之下。好酒淫樂、嬖於婦人。愛妲己、妲己之言是從。於是使師涓作新淫聲、北里之舞、靡靡之樂。厚賦稅以實鹿臺之錢、而盈鉅橋之粟。益收狗馬奇物、充切宮室。益廣沙丘苑臺、多取野獸蜚鳥置其中。慢於鬼神。大取樂戲於沙丘、以酒爲池、縣肉爲林、使男女保相逐其間、爲長夜之飲。」と記されている。
- (3)例えば、白川靜『甲骨文の世界』(平凡社東洋文庫 一九七二年)第二章「神々の世界」《自然のいぶき》「帝は自然の秩序者であり、王はその秩序を地上に實現する責任をもつ。帝が地上の秩序についてなんらかの意思を示そうとするときには、自然の異變をもってそれをあらわした。……」(四二頁)と記されている。
- (4)「立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所紀要」創刊號(同研究所 二〇〇七年)
- (5)「學林」四六號・四七號合併號《白川靜先生追悼號》(中國藝文研究會 二〇〇八年)

(6) 「召方考」「作冊」とも「白川靜著作集別巻」の『甲骨金文論叢』上の第二集（平凡社 二〇〇八年）所収。

(7) 『金文の世界』（平凡社東洋文庫 一九七一年）第一章「殷代の金文」、第二章「周王朝の創業」を参照。

(8) 「立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所紀要」第三號（二〇〇九年）

(9) 『金文の世界』第一章「殷代の金文」、第二章「周王朝の創業」を参照。

(10) 『四祀其卣』集成五四一三「王曰隣文武帝乙宜。在壺大卣」（『殷周金文集成』所收五四 一番の意。以下同じ。）

(11) 『王子聖觥』集成九二八二。

(12) 『作冊大方鼎』集成二七五八に見える。

(13) 「白草坡墓地因水溝的長年冲刷、三座墓葬已經暴露在外、爲防止再被盜掘、考古所對其進行了搶救性的發掘。發掘結果證明三座墓葬早年均已被盜擾、幸運的是各墓均有少量遺物殘留、其中M四〇出土了兩件帶銘文銅器、M四七出土了玉環等五件玉器。在這些墓葬裏出土了一件銅簋和簋蓋、形制很特殊。」（『西安晚報』二〇〇五年一月一日「周公廟考古獲得階段性成果」）

(14) 近年の《天亡毀》に關する論考（インターネット上で見たもの）を見ると、岐山縣の眉縣としている論者や、禮村としている論者があるが不確かな情報によっている。禮村から出たのは《大孟鼎》だということを私が地元の考古學者から直接お聞きしたことがある。

(15) 陝西省扶風縣召陳村西周建築遺址F3。圖1参照。

(16) 陝西省扶風縣召陳村西周建築群。圖4参照。

(17) 「這次新發現的西周建築基址單體達四〇多處、最大的一處單體面積達八〇〇多平方米、它們集中分佈在西周最高等級墓葬群的陵坡墓地附近。在這些建築基址附近、考古人員還發現了大量的西周空心磚・板磚・和繩紋板瓦的碎片。考古專家稱、這些建築基址等級很高、從其分佈情況看與陵坡墓地、白草坡墓地以及甲骨坑有密切關聯、進一步顯示出周公廟遺址的重要性。」（『央視國際』二〇〇五年四月一九日「周公廟遺址新發現四〇多處西周建築基址」）

(18) 白川靜「衣祀考」（『說林』第二卷四號 一九五〇年）。

(19) 「學林」四九號合併號「白川靜先生追悼號」（『中國藝文研究會』二〇〇九年）

(20) 『爵父癸盃』集成九三六二。

圖版

圖1 陝西省扶風縣召陳村西周建築遺址F3（『文物』一九八一年第三期所載の傅斯年「陝西扶風召陳西周建築遺址初探」より）

圖2 天亡毀器影（中國國家博物館のホームページ提供のもの）

圖3 天亡毀銘文（中國國家博物館のホームページ提供のもの）

圖4 陝西省扶風縣召陳村西周建築群（『文物』一九八一年第三期所載の陝

西周原考古隊「扶風召陳西周建築群基址發掘簡報」より）

圖5 爵父癸盃 集成九三六二

（立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員）